

いがくしつけんぎしゅう さんかはつもう

## #36 醫學質驗義集 産科發蒙

作者：片倉元周（かたくら・げんしゅう 1751-1822）

刊行：寛政7年？(1795)



### 📖 解題

#### ■ 内容

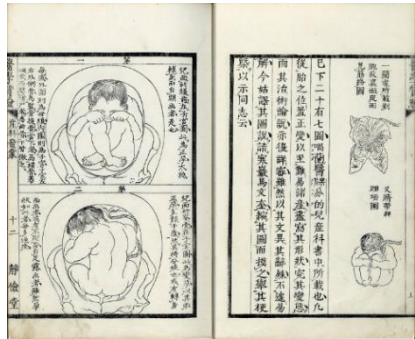
書名にある「質験」とは“ものの本質を調べる”というような意味で、実践に基づいているという姿勢を打ち出したシリーズ名と考えられる。内題に「五種」と記されているように、ほかに『医学質験仁集傷寒啓微

（いがくしつけんじんしゅう しょうかんけいび）、『医学質験智集 保嬰須知

（いがくしつけんちしゅう ほえいすち）、『医学質験信集 青囊瑣探（いがくしつけんしんしゅう せいのうさたん）』が出版された。（3点とも当館所蔵あり。儒教の徳目「仁義礼智信」に基づく巻表記。『礼集』は未刊か。）

本書はこのシリーズのうち産科学についてのもので、全6冊から成る。第4巻までは概論及び症状に対する薬の用法についての内容で、第5巻は34の症例を掲載、第6巻は図入りで難産等の対処と産前産後に対する薬の用法が書かれている。賀川子玄（玄悦、1700-1777）が自らの観察・経験に基づいて立てた「賀川流産科」学説を基本としながらも、著者自身の知識や経験を盛り込んでおり、特に、「鳴蘭医牒分的児（ワランダノイデイヘンテル）」（Deventer、1651-1724）の産科書から臨産難易諸図27葉（上掲）を、「英機黎国医（イギリスコクノイ）」（書中に人名はないが、スメリ（Smellie、1697-1763）とされる）の産科書から分娩鉗子図2葉を、転載、紹介している点が注目される。

当館所蔵本には表紙に「田藩文庫」、序に「田安府芸台印」「献英楼図書記」



[K49. 9/3]

という印が押されている。『田藩文庫目録と研究』([059.93/27])によると、この3つの印は田藩文庫(田安德川家旧蔵資料)の主要蔵書印とされており、当館所蔵本は田安家旧蔵資料と思われる。

#### ■ 作者

片倉元周は江戸後期の産科医。字は深甫、鶴陵(かくりょう)と号す。出身は相模国だが詳細については、津久井県(現・相模原市緑区)、煤ヶ谷(現・愛甲郡清川村)、鎌倉と諸説ある。12歳で江戸に出て医家・多紀藍溪(元徳、1732-1801)について医学を修め、詩文は儒学者・井上金峨(いのうえ・きんが 1732-1784)に学ぶ。25歳で開業し繁盛したものの、天明年間に火災に見舞われ家産焼失。これを機に京都に遊学して、賀川流産科を究めて戻った。蘭方医・嶺春泰(みね・しゅんたい 1746-1793)と知り合ったことで、イギリスやオランダの産科書に接する機会を得る。西洋産科の説を取り入れ、日本の産科学の発達に貢献した。産科だけでなく、梅毒・癩病に関する『黴癘新書』(ばいらいしんしょ 全2冊 1786刊)、小児医学についての『医学質験智集 保嬰須知』(全2冊 1848刊)など、著作を多く残している。

#### 本文を読む

< 翻刻 >

「産科発蒙」(『日本産科叢書』増田知正ほか編著 松崎留吉 1895)

※国立国会図書館デジタルコレクション(インターネット公開)で閲覧可能

「産科発蒙」(『近世漢方治験選集』9 名著出版 1986) ※当館未所蔵

#### 参考文献

『日本医学史』富士川游著 裳華房 1904 [490.21/4]

『日本医学史』富士川游著 日進書院 1931 [K49/379] ※1904刊の再刊

梶完次「明治前日本産婦人科史」(『明治前日本医学史』第4巻 日本学術振興会 1964) [490.21/10/4]

『将軍と町医—相州片倉鶴陵伝—』森末新著 有隣堂 1978 [K28.95/13]

『田藩文庫目録と研究』人間文化研究機構国文学研究資料館編 青裳堂書店 2006 [029.93/27]